仏教的世界観の体験と創造的体験
――人と世界をつなぐ「感性」――

秋　田　貴　廣
（立　正　大　学）

はじめに

現代＝高度情報化社会と呼ばれる社会に生きる人間は，いかに調和的であり得るだろうか。そこに生きる人間は，あふれる映像情報の中で，一歩も移動することなく様々な視覚体験ができるようになったが，それは実際に手で触れ，身体ごと体験した風景ではないので，眼・頭の中と，身体の感覚のずれが生じる傾向がある。我々は物質・身体から離れた視覚（映像メディア）による影像（イメージ）の世界にどっぷりと浸っているのである。それは結果的に，身体からの遊離とともに人々の「感性」に重大な影響を及ぼしていると考えられる。従来の常識では理解困難な事件が多発している背景には，このような「感性」の問題がある。環境問題に対する危機意識を持つ人はふえつつあるが，感性の問題は人間それ自身に直接関わるものであり，かつ自覚なしに進行するがゆえに，より深刻な状況である。

一方，人類は今，例えば民族対立や環境問題など，地球的な規模の「平和」のあり方についての解答を求められている。その解答を得るためには，認識対象として「自然」や「人間」を捉えるだけでなく，人間存在の本質に立ち返って「人間性」を回復する，あるいは，それについて新たな認識と自覚を獲得するための思考と実践が要求されていると言えるであろう。

このような状況を前提として，深遠なる仏教の思想や，善・悪というような観念的な事柄が，単なる観念にとどまらず，本質的に人間を支える規範となるためにはどうしたらよいのか。観念としての知識が，何がしら本質的なことを実感することにおいては道標にすぎないこと，その実感の中においてその道標は消え去ることを我々は知っている。しかしその道標すら感知できない「心」が多く存在する状況であることを筆者は認めざるを得ない。では，それに対して何ができるのか。この実践的かつ究極的な課題を共有するものとして，日常的に「感性」の問題に関わる美術家の立場から，ここで，そのためにどうしても欠かせない人間の感覚・感性について考察し，その上で「仏教」の現代における働きを補完するものとしての「感性」教育の可能性を提示してみたい。

1　感覚による外界認識の成り立ち

森の樹木が風にゆれているのを眼にした時，梢や葉が風圧でしなう様を我々の眼は微細に追いかける。葉裏が一斉にひるがえって震える姿には，何か心に深く響いてくるものがある。肉体はそのとき，自分が葉そのものに変身して，風に揺すられているのを感じる。と同時に，もうひとつの自分は，風になって葉に触れ，葉を揺すり，葉を裏返す力として作用しているかのように感じたりする。この，作用する「力」と作用される「事物」の両方に分裂しながら，その両方に加担している想像力の正体は何であろうか。

眼すなわち視覚はその時，ただ「見る」という機能を越えて，いや越えてではなく，本来，視覚作用のなかに含まれている触覚的認知機能を作動させているといってよい。この触覚的認識機能を，「眼の中の触手」と呼んでみると，事態はもっと判りよくなるように思う。つまり，我々の眼の

中には，見えない「手」がひそんでいて，「見る」という瞬間の機能の働いている最中に，この眼の中にかくれている見えない「手」を繰り出して，当の見ている事物に触っているのである。それは，事物の堅さ・柔らかさ，厚さ・薄さ，粗さ・滑らかさ，暖かさ・冷たさ，といったものをちょうど，現実の手がそれらに触って確かめるのと同じ手続きを踏んで確かめようとしているわけである。

このような視覚の機能に含まれる単に「見る」に留まらない認知作用について，普段，人はほとんど意識してはいない。我々は，いつ，どのようにしてこのような能力を獲得したのだろうか。この問いかけの中には，人間存在の自覚にかかわる重要な何かが含まれているように感じる。そこで今一度，人がものを知覚し認識するに至るプロセスを確認してみたい。

2　感覚による外界認識の成り立ち

赤ん坊の五感は，初めそれぞれバラバラでお互いに連関しない状態にあると言われている。視覚を例に取れば，かたちを認識することができず，外界はぼんやりした動く光の模様のように見えているらしい。そのような状態から，ものに触ってその抵抗感を感じたり，目に見えているものとその時に触っているものが同じものであることに気づいたりしながら，長い時間をかけて五感を連動させることを学び，外界をひとつのまとまりのあるものとして知覚できるようになる。

例えば我々は石ころを見ればそれが石ころであることが分かるが，初めて石ころに接した赤ん坊はもちろんそれが何であるか即座に知ることはできない。赤ん坊はその初めて見るものに接し，それに触り，持ってみて叩いてみたり，あるいは口に入れてみたりと，対象といろいろなかかわりを持つ。そのようなことをしながら，視覚対象の視覚的イメージと他の触覚

などの感覚的印象を重ねて，しだいに対象を自分とは違う，また他のものとも違うひとつのまとまりとして認識してゆく。このように対象の感覚的な記憶を伴った概念が形成されて，初めて「石ころ」というものを瞬間的に認識できるようになるのである。そして言葉を覚え，また新たな経験をする度にその概念は更新され，他の概念と結びついたりして徐々に複雑になってゆく。

大人が石ころを認識するときにはまず視覚的に石ころの映像を認知するが，それと同時に，瞬間的に我々の認識の中には，石ころに対する感覚的認識を伴った概念が想起される。石というものが触ればどのような質感で，たたくとどのくらい固くて，持ってみればどれほどに重く，投げたものが人に当たればかなり痛い……。このようなことが瞬間的に了解されるわけである。我々の「見る」という行為は，眼に映る映像のみによって対象を認識しているわけではなく，視覚対象に対応する触覚など他の感覚の記憶を，対象の概念として同時に想起するというかたちで，それがたとえば石ころであると認識しているのである。何気なく何かを見ている時でも，無意識的ではあるがそのようなことが起こっていることを確認しておくことは，我々の感性を考察する上での前提となるものと考えられる。

3　感性の発達と自然環境

感覚レベルにおける基本的外界知覚能力が発達するとともに，それを土台として何をどのように感じるかという「感性」の発達が始まる。その問題に対してアプローチするためには，心の発達ということも含めてさらに広い視野による考察が必要である。その詳細については筆者自身の今後の課題であるが，今の時点で言えることは，人間の外界認識について，大人はすでに感覚の機能が完成あるいは固定化しているために，現在自分が認

識している外界のあり方が唯一のものであると思いこんでいる，ということである。大人は幼児期の記憶を失っており，最初から外界を今と同じように認識していたと特に疑うこともなく思いこんでいるが，実は，その認識は幼児期に長い時間をかけて，全身で自分を取り巻く環境とかかわる中で育まれてきたものなのである。それは，どのような環境の中で感覚の機能が育まれていったかによって，個々人の外界の認識の仕方にも当然違いがでてくるということでもある。

これを一言で言うならば，人間の感覚，ものを感じる能力は，我々が普段思いこんでいるように生得のものではなく，環境とのかかわりの中で形成され，環境によって育まれるものなのだということである。逆から言えば，感覚は環境の質によっては十分に育まれないこともあるということである。

このように考えてくると，現在我々を取り巻く環境は人間の感覚・感性を十分に育むことができるものかどうか，非常に心配になってくる。感覚というものは言うまでもなく基本的に身体的な能力である。そして忘れられがちなのが，我々も自然の一部である，というよりも，自然そのものである。よく人間のことを大宇宙に対して小宇宙と言うが，同じように，大自然から生まれてきた生命として，身体というものは小さな自然ということができる。そして「感覚」というものは，その小さな自然である生命が大自然の中で自己を維持してゆくために（即ち，生きてゆくために），環境の性質（即ちある事がらが安全であるかないか，あるいはあるものが食べられるか食べられないかなど）を知る能力として発達したものであるともいえる。

小さな自然である身体の能力である感覚が何によって良く育まれるかといえば，それはもちろん大きな自然との交流によってである。「感覚」は，

仏教における「十二処」の考え方にも見られるように，それぞれ自然界に対応する境界を持っている。進化の面から見るならば，それぞれの境界に応じて感覚器官が生じたというべきだろう。光に対して視覚が，空気の振動に対して聴覚が……というように，小さな自然，即ち自然そのものである身体の機能である感覚も，このような意味では自然そのものであると言えるのではないだろうか。そのような感覚が自然との交流によって最も良く育まれる，いや，自然との交流なしには十分には育まれないというのは自明のことである。

仮に人工物のみの環境の中で育ったとしたならば，ものの存在や空間の把握などの，いわば感覚のハード面に属する部分は発達するだろうが，どのように感じるか，どのように多様に深く感じるかという感覚の内容あるいは質にかかわる面，ソフトに属する部分は育ちようがないのではないだろうか。

周知のとおり，現在我々が生活している環境からは自然はどんどん締め出されていっている。そのことに危機感を抱く人は多くなってきているが，一般に考えられているよりも事態は深刻であると考える。現在子どもたちの生きる力，考える力が脆弱になってきたということが言われているが，その原因の一端は，子どもたちの感覚・感性が十分に発達していないということにあるだろう。何かを考えるといっても，考える素材は感じる力によって提供されなければならない。豊かに，多様に，深く感じることができてこそ，それを素材として力強い思考が可能になる。感じる能力が発達していなければ，その土台の上に成立する諸能力も脆弱にならざるを得ない。

4　視覚の土台―触覚

さて，これまで「感性」の発達において身体的感覚とその経験がいかに重要であるか，現代の状況がどのような危険を孕んでいるかを考えてきたが，それに対する処方箋を得るためには，今一度，視覚と触覚の関係について，より深く考察した上で認識を新たにする必要がある。

ここで視覚という感覚をもう少し詳しく見ていくと，近代ドイツの思想家ヘルダー[(1)]によれば，視覚は次の三つの特徴を持っている[(2)]。第一に，遠隔性。視覚は我々から遠く離れた対象の大きさ・質感・重量などを，触れることなく推し量ることができる。第二に表層性。視覚は，その遠さゆえに対象の表面しか捉えていないとともに，その印象は我々の内側までとどかない。これは他の感覚と比べてみるとわかりやすい。例えば触覚や味覚・嗅覚は，対象にじかに触ったり，口に入れて味わったりして，対象を実感をもって捉えることができる。そして，三番目の瞬間的多様性。これは他の感覚とは比べようがないほど，視覚は一遍に多くの徴標を捉えることができるということである。

この三つの特徴が連関して視覚の視覚性を構成しているわけだが，ヘルダーはそこから二つの帰結を見いだしている。それは第一に，視覚の「冷たさ[(3)]」であり，第二にその冷たさゆえに，視覚の対象は知性による分析を受け入れやすい，ということである。それは視覚対象が我々の内に入り込まず，我々の前に並存するからである。視覚が「最も判明な感官[(4)]」あるいは「哲学的感官[(5)]」と呼ばれるのはそのためである。もっとも，視覚に分析能力が備わっているわけではなく，分析を行うのはあくまでも知性であるが，視覚は分析に適しているゆえに知性に接しているのである。

ここで重要なことは，視覚は確かに物に触れずとも，見るだけで対象の

特性を認知することができる。ただし，この「遠隔性」を視覚が持ち得たのは，他の感覚，特に触覚との協働がなければならなかったことを思い出さなければならない。視覚の生成を支えているのは，人間が子供の時期に視覚を触覚とともに用いることによって獲得する経験なのである。

それでは，触覚とはどのようなものだろうか。

触覚とは，身体的存在者としての人間が他の身体的存在者と触れ合い，出会うことを可能にする媒体である。身体的な他者とのかかわりには，自己と他者とが互いに制約し合う関係に立つことが前提となる。それゆえに，自らの身体を動かしつつ，身体をもって身体的な他者に触れる，という具体的な経験が必要とされ，この具体的な経験の場の内に，他者の「摑み」[(6)]としての概念が生じる。つまり，触れることによって他者の摑み，すなわち実感を得るというところに触覚の特徴がある。

ところが，自立的思考を営む知性にも，また知性に最も接している視覚にも，それが遠隔性と表層性を特徴とするがゆえに，この身体的関係が欠如している。ヘルダーはこのことについて，「千の眼を持った者も，仮に触覚がなければ，触知する手がなければ，一生，身体的・実体的性質に関しては何一つ本来の概念を持つことがないであろう[(7)]」と述べている。

このように，本来，触覚は視覚の土台であるにもかかわらず，いったん学習が成立すると，我々はもはや触覚の助けを借りて「見る」ことを学んだ過程を意識しなくなり，触覚が視覚の「土台」であることを忘却するに至る。こうして触覚と視覚との間に一種の転倒が生じ，それゆえ，我々は普段，「眼の中で働いている手」を意識することがないのである。

5　「形成」を想像し得る「力」――感性の可能性――

我々の眼に写っている世界は，現実の断片である。また，我々が何かを

考えるということも，それを対象化することである以上，そこで導き出されたものは，事実の断片としか言えない。それにもかかわらず，我々には対象を実感を持って受け止める能力が備わっている。それは一種の想像力であり，それこそ我々人間の「感性」というものであろうと筆者は考えている。

我々は幸いにも，赤ん坊に触れずとも，それがいかに柔らかく，脆いか，どのぐらいの力で抱けばよいのかをある程度判っている。相手を深く想うことによって，相手の痛みを知ることもできる（ように感じる）。また，美しい夕陽を見て，感動し，実際に身体が暖まることもある。それは，これまでの身体的経験に培われた感性と想像力の賜物である。

この想像力の正体は何か。何かを深く感じること，そして認識することには，自分と対象との一種の同一化に似た作用が働いていると考えられる。何かを深く感じたときに対象との境がなくなるような感じ，これは誰でも経験のあることであろう。その感じをあえて言葉にするならば，「一体化」あるいは「融合」など，筆者はまだ適切な言葉を知らないが，何かに心を重ねる，あるいは何かで心を満たす，このような経験は，単なる感覚的満足ではなく，感性による独自の世界の認識であり，そこには，その形成への予感がある。それは現象に内在する独自な形象構成の過程を経験することではないだろうか。人間には，このような想像力を伴う感性と，それが媒体となる主・客が対立しない認識があるからこそ，自分と同じように他の誰かを，何かを，やさしく包むように慈しむ，ということの可能性が出てくるのである。

この感性の根底には，根源的感覚としての触覚がある。視覚・聴覚・痛覚，その他すべての身体感覚的知覚の全体を貫いているのが触覚である。したがって，触覚的知覚を伴なわない認識というものは，そもそも成立し

得ない。身体が世界と触れ合う瞬間の感動は，触覚そのものであり，言葉以前の部分，あるいは言葉以後のものを含んでいる。あらゆる認識の基底には触覚が横たわっており，すべての知覚と思考の内部を，触覚を通しての知覚が貫流している，というべきなのである。触覚は，知覚の基底を成す層についての全的直覚的把握を行っている。この，全的で，直覚的な対象の把握がなければ，我々は，真実の「世界像の構成」を行うことができないと考える。

一般に，このような感性は，詩人や芸術家の専売特許のように，つまり非日常的な体験のみに必要なもののように思われがちであるが，日常的な生活における営みのすべての根底に，このような感性は関わっている。

我々が，何かを考える，ということについても，何ら実感の伴わない思考というものが存在するであろうか。もしあるとするなら，それはすべてを自らの外部に存在する対象として固定化する，すなわち客体化するという意味で，視覚が表層的で冷たいと言うことと同じように，血の通わない思考といえるだろう。この，知性に最も接し，知性に多くの情報を提供する「視覚」という感覚が，その機能が成立する根拠に触覚があるように，思考する知性にも，それを支える感性が必要であると考えられる。

我々は何かについて思考しているとき，はっと了解する瞬間がある。ときにそれは感動を伴う体験となる。そしてそれを体感して初めて，自分の中で，「ある認識」となっていることに気がつく。それは思考の結果だとしても，それを自分の内部に引き込む「体験」となるためには，共鳴板として，感性が重要な役割を果たしていると考えられるのである。

6　現代における「感性」教育の意義

映像メディアが発達し映像の情報が氾濫する現代，自然と人間がますま

す離れていく環境の中で，身体感覚の欠如がもたらすさまざまな事態が現出している。そのことと，表層的で上滑りな議論が横行する思潮がパラレルな関係にあることは決して偶然ではない。

映像は，あたかも真実を映し出しているように見えるが，それはあくまでもその断片であって，そのほかのものは人間の想像力で補わなくてはならない。そして本来，人間はそのような能力を持っているはずである。しかし，多数の映像情報に短時間で触れることは，その個々の映像を吟味し，解釈する余裕を与えられないということも現実にはある。限られた情報から想像の力を借りて見えないものを見る，先を予感する直感力は，あふれる情報を前にして十分に発揮されなくなり，そして，目で見た映像が現実の断片であることを忘れさせる。映像メディアの発達は，目で見るという機能を突出させると同時に，それ以外の感覚を鈍化させ，結果的に，視覚・思考と，身体感覚とのズレと断絶を生じさせている[(8)]と考える。

ごく一般的に善・悪の問題について，多くの若者が，人に迷惑をかけなければいい，と考えているが，そこに「無関心の罪」などが存在するということを感じる余地がどれ程に残されているだろうか。我々は存在することで互いに影響し合い，すべては「縁起」の袂にあるということをどれ程に実感できるであろうか。かつて，身体を置く場所と視覚世界は切っても切れない関係であったが，映像メディアが発達した今日に至り，それは切り離された。画面に映し出される世界の出来事を俯瞰し，その世界に実感が持てなくなってしまった[(9)]。それは自分自身が存在していることの実感の希薄さにつながっていると考えられる。そのような心において，善・悪の問題がどれ程に意味を持つのであろうか。

しかし，このような状況だからこそ，根底にある存在を自分の内部に引きつけて，そしてそこにおいて考察する，という態度が重要であるといえ

るだろう。そのための前提条件として，すべての身体感覚的知覚の基底としての「触覚」の自覚と，それが育む「感性」をいかに豊かにするかということが必要であろうと考える。

「視覚」ならびに思考する「知性」が事物を対象化するのに対して，「触覚」による対象把握が全的だというとき，それはその感覚の中では，対象と，それを知覚し認識する主観としての人間が明確に分かれていない，ということである。そのような触覚を自覚することは，本質的な世界像把握を行うためのアナロジーとしての役割を果たし得ると考えられる。根源的感覚としての触覚との出会いは，精神と身体の未分化の領域で成立する。それゆえに，現実とは，我々が素朴に外の世界に認められる固定した「存在」ではなく，現在進行形の「生成」である，ということの予感を含んでいる。したがってその世界認識は，「形成」あるいは「過程」的意味合いにおいて「人間性」を捉えることにつながり，さらに，「認識する主観としての人間」から，「人間性としての人間」へと移行する契機になる可能性を秘めているだろうと考えられる。

このような身体感覚の自覚に基づいた「感性」が育まれなければ，いかなる優れた思想も心の網膜を刺激し得ないであろう。「仏教思想」という人間存在に対する大変深い洞察が，悩める現代人に対して十分な働きを持ち，人を支える規範となるためには，それを準備するものとしての「感性」の教育が要求されていると考えている。

7　想像から創造へ

上記の考察の中で「感性」について，「形成」を感得し得る「想像力」という言葉を用いて表現した。この「想像」の力は，それを用いて事物を感応することによって，クリエイトの「創造力」に繋がる。そのもっとも

分かりやすい例が芸術体験である。芸術作品に感動する時，感動の内容の大半を占めるのは共感であるが，この「共感」とは，その形成に立ち会うということである。それはいわば，作家によって吹き込まれた「創造の息吹」に自ら吹かれるということであって，そこには「追創造」の要素が多く含まれている。このような意味で，感応するイマジネーションはそのままクリエイティヴな体験となり，力であるといえる。そしてこのイマジネーションの力の中には，すべての「文化」の種子と，未来を切り開く可能性が含まれていると考えている。

このような考えの下に，「感性」教育の一環として，また文化を「発生」から捉えてその意味を体感する手段として，筆者は仏教を専攻する学生に対して，仏像彫刻の実習授業を行っている。その方法論と成果については別の機会に述べるものとしたい。

おわりに

本稿において，筆者はほとんど仏教とは関連のない言葉を用いて，自分自身の体験から得た感触に基づいて考察を行ったが，実は，その内容の多くの点において，仏教の中で語られていることとの共振を感じている。そしてこの「共振」は筆者だけのものではないだろうという予感があったので，言辞に厳密性を欠くことを承知の上で，一美術家の我流の考察をそのまま提示した。それは，筆者が本稿で目的としたのがテーマに対して仏教学とは幾分違う視点を提供し，それを糸口として，ある観念が心を振るわせる，まさにその契機を探ることであったからである。

なお，本稿の内容は，彫刻家の伊加利庄平氏と筆者が，数知れず行った対話の機会から導き出されたものである。この場を借りて，氏に謝意を表したい。

注

⑴　ヘルダーは『彫塑』（1778年）の中で，絵画に対して視覚を，彫刻に対して触覚を対応させながら，視覚と触覚の関係性について考察している。内容の詳細については，小田部胤久「『彫塑』における触覚の美学」（『象徴の美学』，東京大学出版，1995年）を参考にし，ヘルダーの言葉を引用させていただいた。

⑵　小田部胤久・前出 p. 134.

⑶　前掲書，p. 135.

⑷　前掲書，p. 135.

⑸　前掲書，p. 135.

⑹　前掲書，p. 136.

⑺　前掲書，p. 136.

⑻　宮脇　理・花篤　實編「メディアの身体化」（『美術教育学』，建帛社，1997年。p. 199～201 参照）。

⑼　前掲書，p. 209.